

誰かが触った

宮原昭夫



芥川賞受賞作

偏見に晒され、社会から隔離された療養所に
思春期を迎える少年少女らの愛と喜びを、深
い共感と心痛むユーモアで描く感動の話題作

河出書房新社

定価650円

宮原昭夫⁷⁶⁵³¹
かが触った

河出書房新社



誰かが触った

昭和四十七年七月三十日 初版発行
昭和四十七年八月二十五日 三版発行

定価 六五〇円

宮原昭夫

昭和七年、横浜生まれ。

昭和三十五年、早稲田大学第一

文学部ロシア文学専修卒業。

昭和四十一年、「石のニンフ達」

で第二十三回文学界新人賞受賞。

著書に『石のニンフ達』（文藝

春秋）、『あなたの町』（冬樹社）

がある。

著者 宮原 昭夫

発行者 中島 隆之

発行者 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座（東京）一〇八〇二

電話 二九二一三七一一

印刷 文弘社

製本 若林製本

© 1972 AKIO MIYAHARA

0093-037224-0961

目次

——誰かが触った——
5

——松林のむこう——
111

——まがりかど——
145

——死神たち——
183

装帧——田沢茂

誰かが触った

誰かが触った

1

休み時間、ジュニア雑誌に読みふけている中学三年生の歌子の、長いお下げ髪を、隣の席の悦子が見ている。

やがて彼女は、

「歌子ちゃんはきれいでいいなあ」溜息をつく。歌子はグラビアの方へ顔をうつむけたまま顔をしかめる。

「そのお下げ、巻いてアップにしたらきつと似合うよ。やっただよう」

「いいよ」歌子は顔も上げずにそっけなく呟く。

「やっただげるよ。あたし、髪結うの、うまいんだから」

「髪ばっかし、きれいにしたってしょうがないよ」

「そんなこと言わないでさあ、やらしてよう。ほら、こういうふうにな、内側に巻いて……」
お下げに触る。歌子は激しく頭を反らして、

「いやだったら」

「けちだなあ。結わせてくれたっていいじゃないのよう」なおも触ろうとする。歌子はすっかり癪を立ててしまつて、

「いやだって言ってるじゃない」きめつける。悦子は妙に断乎として、

「だって、あたし、結いたいんだもん」

「そんなに結いたけりゃ、自分のを結いな！」言ってしまったから、歌子はさすがにはっとする。悦子も一瞬黙りこんでしまったが、やがて、お経でもとなえるようなのろのろした言い方で、

「あたしだってね、自分のを結いたいよ」

軽症で退園間近かな歌子と違い、悦子はかなり脱毛が顕著だ。

この教室は、普通の学校のその三分の一ほどの大きさで、それでも黒板から机から窓までいかにも学校らしく整えられていて、まるで教室の精巧な模型のようだ。ここは、或る癩療養所の、青少年少女患者のために園内に設けられた、中学校の分教場だ。……

その時、だしぬけに扉が開いて、この教師の馬場が、見知らぬ女性と連れ立って入って来ながら、

「……このこと、隣りが、中学の教室です」説明している。馬場は三十そこそこといった齡恰好の長身の男で、連れの小柄な女性は彼よりいくらか齡上にみえる。二人とも白い予防衣を身にまとっているのです、非患者であることが一目で判る。

女性のほうは戸口でかすかなためらいを見せてから、ぎこちなく入ってくる。

「ちえっ、また参観かあ」中学一年の増夫が歌子たちから離れた席でこっそり舌打ちする。

「増夫」馬場がそっちを睨む。増夫は首をすくめる。

「せっかく来て下さったんじゃないか。失礼な事言っちゃいかん」

「はい」増夫が閉口した声を出す。

「だけどさっ……」だしぬけに歌子が、場にそぐわぬほどうわずって、

「あたしら、別に悪いこととして入れられてるわけじゃなし、動物園の猿でもないんだからね。なにもわざわざ見物に来ることないよ」

「歌子、どうしたんだ？ 急に」馬場は怒るよりもびっくりしてそんな歌子を見つめる。それから、彼は嚙んで含めるような調子になって、

「いつも言ってきたせてるだろう。むしろ一人でも多くの人に参観してもらって、癪がごく

普通の病氣なんだってことを知らせなきゃいけないんだ、って。参観をいやがるのは、自分で自分の病氣に偏見を持って差別してるってことだぞ」馬場はかたわらの女性を振りかえり、ちよっとまごまごして、

「どうも失礼。氣になさらないで下さい」

「そんな、氣にするなんて……」参観の女性——加納妙子はせきこんで、

「私こそ、みんなの氣分を害してごめんなさいね。だけど……」歌子の方に向き直り、

「私だって、面白半分で見物に来たわけじゃないのよ。私、この小学校の先生になるの。だからあちこち見学して勉強しとかなないと困るでしょ？」

「じゃあ……」馬場は思わず加納妙子の顔を見て、

「いよいよ決めたんですか？」

「ええ、いましがた医局長さんのお話、うかがってて。……だって、つまり普通のそのへんの学校勤めと全く同じわけでしょう？」

彼女はいま医局長のもとで聞いて来たばかりの知識を頭の中でおさらいする。——このやまいも、特効薬プロミンが発明されて以来、軽症なら三カ月で全治するようになった。伝染力も非常に弱く、乳幼児以外には殆ど全くうつらない。外国に、二年目ごとに自分の体内に癩菌を注射してみた医学者が居たが、何度やっても発病しなかった。何年もまえの国際癩

学会の決議でも、この病氣は完全に治癒が可能な、ごく普通の病氣であると声明されてい
る。――

「結局、今じゃ、遅れてるのは医学じゃなくて、社会常識なのね。社会通念が医学よりも百年も遅れてるのよ。私たちは、みんなでこの偏見の厚い壁を、手を取り合って打ち破って行かなければいけないんだわ」

「わあすてき！」突然歌子が歓声を上げ、席を立て寄って来ながら、

「あたし、感激しちゃった。ほんとにそうだわ。あたしたち、手を取り合って偏見とたたかわなきゃいけないのね。手を取り合って！」

歌子はうたうたようにくりかえしながら、加納妙子の鼻先にいきなり手を差し出して握手を求める。妙子とはっさに、どうしても手が出せなくて、顔を赤くして、度を失ったにやにや笑いを浮べたまま棒立ちになった。歌子はわざと執念深くそのまま手を引っこめようとしな
い。

取り返しつかないほど気まずい間があいてしまってから、馬場が、やっと、

「歌子」あわてて目くばせをしてみせる。歌子はわざとらしく鈍感ぶった顔つきのまま、

「あら、だって、いま、手を取り合って行こう、って言ったわ、この人」

さすがに馬場も一瞬黙り込み、加納はまるで叱られた生徒のようにうつむいて立ちつくし

てしまう。

馬場は軽い咳ばらいをしてから、

「……しかし、まあ、いくら普通のこわくない病気だからって、医学的な予防の配慮ってものは、いくらしたってしすぎるってことはないんだから」

「あつ、そう……」歌子は急にやぶれかぶれのなれなれしさで、馬場に向き直り、

「じゃ、先生、あたしが医学的に全快したら、お嫁にもらってくれる？」

「お嫁？」馬場はあつけにとられる。悦子がかたわらでケケケと笑いだす。そのまま、あけすけに笑い続けている。

「やっぱし、お嫁は、外の一度もかからなかった人をもらうでしょ？」それから歌子は急に毒々しい早口で言い放つ。

「医学的なんて、うまいこと言ってる」

「歌子、ほんとにどうしたんだ？ 今日」馬場は心配そうに歌子の顔を覗き込む。彼女は痼性にさつと顔をそむけて、

「外の人って、いざとなると結局私たちを見捨てるんだから」

馬場は、何か言おうとして、急にひるんだように口をつぐむ。

放課後の掃除を見回りに、馬場が教室へ顔を出してみると、当番の歌子が床を掃いている。うしろをついて回りながら、少女舎の舎母の金井さんがしきりにくどくど何か言いかせている。歌子は振りむきもせずに黙ってせせと箒を動かしている。母親と一緒に入園している歌子のような場合は、一般舎で家族と暮すのが普通なのだが、目下彼女の母親は余病を併発して園内の病院に入院中なので、歌子は少女舎に引きとられているのだ。

金井さんは馬場をみるとびよこんと一つお辞儀してから、まるで話の続きのような調子で、「……だからねえ、先生からもよく言ってきたよ。……また面会に見えてるんですよ、お父さんが。それなのに、あいかわらずどうしても会わないって言い張って……情のこわい子だねえ。せっかく来てくだすたんじゃないの。ほかの子をみてごらん。アッちゃんだって、タアちゃんだって、うちのかたがみえるって言う、前の晩は眠れないくらいうれしがるのに」

「歌子、どうして会わないんだ？」

歌子は馬場の顔を見ようとせず、勢よく床を掃き続けている。彼は溜息をつく。どうして——と訊くまでもなく、歌子が会いたがらない理由は判っている。彼女の父は、彼女と母が入園後、離婚して他の女と一緒に暮しているのだ。——外の人はいざとなると自分たちを見捨てる——さっきの歌子の捨てぜりふが馬場の脳裏をよぎる。……一つにはそれで彼女は

今日荒れぎみだったんだな。

「何度も言うようだけどねえ、お父さんを恨んだって仕様がななんだよ。悪いのはお父さんじゃなくて、病氣なんだから。……なにしろ、病氣が病氣だからねえ」金井さんも溜息をつく。

「歌子、おまえは、もうじき退園出来るんだろう。そうしたらお父さんの所へ帰るんじゃないか」

歌子は急に手を止めて強いまなざしで馬場を見返す。

「そうだよ。お父さんもそれを楽しみにしてられるんだよ。一緒に暮^ひしてる女も、気持よくあんたを引き取るって言うてくれるそうだよ。……よく出来た人だよ。なかなか出来ない事だよ、ここに居たもんを引き取るってのは」金井さんは感心したように首を振ってみせる。歌子は黙ってかぶりを振る。そしてまた床を掃き始めながら、自分のいやさをもてあましたようにもう一度、強く首を振る。

三人はちょっと黙っている。それから、馬場がひっそりした口調で、

「でもね、歌子、お父さんのところへ帰らないで、退園後どうやって暮して行くんだ」

「働^{はたら}くっていても、おいそれと仕事はないしねえ、こういう病氣したもんには」金井さんがひとりごとのように呟く。歌子は箒を持ってうつむいてじっとしたまま、くやしさのあま